2015年12月19日（土）　インド大使館　ウパニシャッド（第７回）

ブラフマンの本性について、ウパニシャッドの中にあるブラフマンの本性についての引用句を使って説明しています。

ブラフマンの本性はとても精妙ですからその理解はとても難しいです。そして、心が純粋にならないとその理解は難しいです。ウパニシャッドの聖者たちは、ブラフマンの本性が何であるかについて何回もいろいろな例を使って説明しています。

その説明によって最初は頭で理解できます。深い理解のためにはさらに別の実践があります。我々のクラスの目的は、最初に頭で理解することです。そのために説明しています。前回（2015年11月14日）は、次の２つの句（前回配布されたプリントに記載）を説明しました。

⑧　yattad adṛesyam agrāhyam agotravarṇam

（ヤッタッド　アドレャッシャム　アグラーヒヤム アゴートラヴァルナム）

acakṣuḥ śrotram tat apāṇipādam /

（アチャクシュㇷ　シュロートラㇺ　タット　アパニーパーダㇺ）

　　nityam vibhum sarvagatam susūkṣmam tat avyayam

（ニッティヤㇺ ヴィブㇺ サルヴァガタㇺ ススークシュマㇺ タット アヴィヤヤㇺ）

yat adbhutayonim paripaśyanti dhīraḥ

（ヤット　アドブタヨーニㇺ　パリパッシャンティ　ディーラㇵ）

⑨　yathā ūrṇanābhiḥ sṛjate gṛhnate ca /

（ヤター　ウールナナービㇶ　スリジャテー　グリンナテー　チャ）

　　　yathā pṛthivyām oṣadhayaḥ saṃbhavanti /

　　（ヤター　プリティッヴヤーㇺ　オーシャダヤㇵ　サムバヴァンティ）

　　　yathā śataḥ puruṣāḥ keśalomāni /

　　（ヤター　シャタㇵ　プルシャーㇵ　ケーシャローマーニ）

　　　tathā akṣarāt saṃbhavatīha viśvam

　　（タター　アクシャラート　サㇺバヴァティーハ　ヴィシュヴァㇺ）

クモの巣の例を使った説明がありましたね。今日はプリントの⑩の説明から始めます。

　⑩　brahmaivedam amṛtam purastāt /

　　（ブランマイヴェーダㇺ　アムリタㇺ　プラスタート）

　　　brahma paścād brahma dakṣiṇataḥ ca uttarena /

　（ブランマ パシュチャード ブランマ ダクシナタㇵ　チャ　ウッタレーナ）

　　　adhasca ūrdhanca prasṛtam /

　　（アダスチャ　ウールダンチャ　プラスリタㇺ）

　　　brahmaivedam viśvamidam variṣṭham

　　（ブランマイヴェーダㇺ　ヴィシュヴァミダㇺ　ヴァリシュタㇺ）

［マハラジが最初に朗誦し、次にマハラジの朗誦の後に続いて皆で朗誦し、

最後にマハラジと皆が一緒に朗誦］

この句の意味を説明していきます。brahmaivedam（ブランマイヴェーダㇺ）は「ブラフマン」、amṛtam（アムリタㇺ）は「不死」、purastāt（プラスタート）は「前」、brahma paścād（ブランマ パシュチャード）は「ブラフマンは後ろ」、brahma dakṣiṇataḥ（ブランマ ダクシナタㇵ）は「ブラフマンは南」、uttarena（ウッタレーナ）は「北」、adhasca（アダスチャ）は「下」、ūrdhanca（ウールダンチャ）は「上」、（brahma）prasṛtam（プラスリタㇺ）は「ブラフマンはどこにでも広がっています」、viśvamidam（ヴィシュヴァミダㇺ）のviśvamは「宇宙」、variṣṭham（ヴァリシュタㇺ）は「一番偉大なもの」です。

全体的な意味は次のようになります。

「ブラフマンは不死です。ブラフマンは前です、後ろです、南です、北です、下です、上です。この宇宙はブラフマンです。ブラフマンは一番偉大なものです」

amṛtam（アムリタㇺ）は、mṛtam（ムリタㇺ）の接頭にaが付いてmṛtamの否定形（「非、無、不」など）になっています。mṛtam（ムリタㇺ）は「死にます」や「無くなる」の意味ですからamṛtam（アムリタㇺ）は、「死にません、無くなりません」の意味になります。「死にます」、「無くなります」という場合、何が死に、何が無くなるのでしょう。それは物質ですね。物質は時間と空間で限定されたものです。或る時は有って、或る時は無いです。物質は始まりと終わりがあります。「或る時に無い」の意味は「死にます」ということです。

我々の存在の人格には３つのレベルがあり、それを３つの体と言っています。

　Sthūla śarira（粗大な体）

　Sūkshma śarira（精妙な体）

　Karana śarira（原因な体）

粗大な体の中に、例えば、肉体的な体があり、それは、例えば、骨、血、皮膚です。精妙な体の中には、感覚、生命エネルギー、心、知性、記憶があります。原因な体は自我です。śariraは「だんだん衰えています」という意味です。

Sthūla śariraは認識できますし、触ることができます。Sūkshma śariraはそれができません。例えば、心を見ることはできませんし認識することはできません。それが精妙ということです。Karana（原因な）という理由は、自我のレベルで我々の束縛された状態が出ているからです。自我のレベルの私意識（「私」、「私の」）で身体を同一視しますと束縛された状態が出ます。そうしないで魂を同一視しますと束縛は消えます。つまり、自我のレベルで束縛か自由（解脱）かに分かれますから、自我を「原因な体」と言っています。

これらの３つの体のほかに、もう一つあります。

Mahākarana

「魂」、「内なる自己」、「霊性」です。「アートマン」ですね。

皆さんが亡くなり火で燃やされますとSthūla śarira（粗大な体）は無くなります。普通、人が死ぬと言っているのは肉体的なSthūla śarira（粗大な体）だけが無くなるということです。Sūkshma śarira（精妙な体）、Karana śarira（原因な体）、Mahākaranaは続いています。解脱のときには「魂」以外すべて無くなります。

ところで、Sūkshma śarira、Karana śariraは毎日毎日無くなっていますが、その経験があることはわかりますか。我々には、目覚めた状態（jagrat）と、夢を見ている状態（swapna）と、夢を見ない深い睡眠の状態（sushupti）があります。目覚めた状態のときは意識がありますね。身体意識、心意識、感覚意識など皆あります。夢を見ている状態のときは身体意識がそれほどなくても心と記憶は働いています。

しかし、深い睡眠のときそれらの意識は何もないです。それは死ぬみたいではないですか。死ぬときのイメージは「私の存在はない」です。深い睡眠のとき私は寝ていますがその存在の考えもありません。それは死ぬと同じことです。けれども本当は死んでいない。そのとき、Sthūla śarira（粗大な体）、Sūkshma śarira（精妙な体）、Karana śarira（原因な体）はすべてありますけれどもそれらはいずれもいないようです。そのときにどなたがいるでしょうか。それはMahākarana、アートマン（魂）です。

魂がありますから寝た人と起きた人は同じです。アートマンが無かったら寝た人と起きた人が別々になる可能性があります。なぜならば、アートマンがないと全部記憶がなくなりますから、自分が誰か、自分がどこに住んでいるか、自分の名前は何かがわからなくなるからです。アートマンだけがそれを続けていますから、寝る前の私と起きた後の私は同じ一つになっています。魂は無くならないですからamṛtam（アムリタㇺ）と言っています。

しかし、魂が無くなっていないという意識は普通の人にはないです。毎日深い睡眠のときにアートマンだけがいる状態に入っていますけれど、その魂の意識は起きた後には続いていません。起きたときにどうしてそれを覚えていないのでしょう。なぜならば、そこに無意識の状態で入っているからです。

例えば、私は逗子にいて寝ていて寝たまま車で東京に運ばれたとします。そして朝起きる前に寝たまま再び逗子に戻されたとします。そうすると、私は確かに東京に来ましたが寝ていたのでその経験はありません。東京には無意識で来ました。そのように、本当は、我々は毎日サマーディに入っています。アートマンだけがいる状態、すなわち、自分の意識（私意識）が無くなって魂意識だけが残っている状態がサマーディです。毎日サマーディに入っていますが無意識で入っていますからその経験と結果は出ていません。

意識があるときにその状態に入ることがチャレンジすべきことです。先ほどの例で言えば、目覚めているときに東京に来ればそのことを全部覚えていますね。その結果も出ます。意識をもってその状態に入りますとそれをトゥリーヤ（Turīya）と呼んでいます。そのときに、私は魂、amṛtam（アムリタㇺ）であるという経験ができます。

先ほどの⑩節に戻りますと、ブラフマンはamṛtam（アムリタㇺ）です。物質、すなわち、Sthūla śarira（粗大な体）、Sūkshma śarira（精妙な体）、Karana śarira（原因な体）は無くなりますが、魂は不死（amṛtam）であり無くなりません。

先ほど説明したように、ブラフマンは前、後ろ、南、北です。書いてありませんがもちろん東、西も含まれます。そして下、上もあります。ブラフマンはあらゆるところにいます。すなわち、ブラフマンは遍在しています。

次は、brahmaivedam viśvamidam variṣṭham（ブランマイヴェーダㇺ　ヴィシュヴァミダㇺ　ヴァリシュタㇺ）です。「この宇宙はブラフマンです。この宇宙は偉大なものです」という意味です。

普通の人が宇宙を見るときにこのような見方はしていません。普通の人の見方は、月があり、太陽があり、星があり、海があり、山があり、自然があるというものです。また、個人的レベルで人と人、動物、自分の国と別の国という見方をします。このようにしてマクロレベルとミクロレベルでたくさんのものを見ます。なぜ、たくさんのものに見えるのかと言えば、それらは皆、名前と形が違うからです。

このように、普通の人にはこの宇宙の中にいろいろなものがあるように見えます。しかし、悟った人の見方では、（１）この宇宙のすべてのものの基礎はブラフマンです。ブラフマンはすべてのものの基礎であるだけではなく、（２）ブラフマンが宇宙のすべてのものになりました。宇宙にブラフマン以外の何もありません。例えば、建物とその基礎がありますね。建物と基礎は別々のものという見方ができます。しかし、それらの両方がコンクリートであるとすると、すべてがコンクリートであるという別の見方ができます。

ブラフマンは宇宙の基礎であるだけではなくブラフマンは宇宙になりました。そのことを考えれば、ブラフマンは偉大なものであることが分かります。普通の人はそのことが理解できていません。なぜならば、無知があるからです。無知があるために、ブラフマンを見ないで宇宙を見ています。例えば、例を挙げて前回に説明したように、我々は縄を見ていないで蛇を見ています。縄が本当ですが、暗さの影響で縄を見ないで蛇を見ています。光を当てればそれが縄であることがわかります。蜃気楼もそうです。本当は砂であるのに陽光の影響で水を見ています。

縄と蛇の例で、誤認が暗さの影響であることを説明しましたが、暗さと無知は同じことです。暗さの影響で縄を見ないで蛇を見ているように、無知の影響でブラフマンを見ないで人、物、動物などのいろいろなものを見ています。もし我々に知識が出ますと我々はブラフマン以外に何も見ません。悟った後はブラフマン以外に何も見ないのです。すべてはブラフマンです。

この⑩句はムンダカ・ウパニシャッドからの引用句です。「ウパニシャッド」（日本ヴェーダーンタ協会／2011年11月21日第2刷発行）のp.93、8～10行も参照して下さい。

次に⑪句を説明します。

⑪　sarvataḥ pāṇipādam tat sarvatokṣi śiromukham

　　（サルヴァタㇵ パーニパーダム タット　サルヴァトークシ　シロームッカㇺ）

　　　sarvataḥ śrutimalloke sarvamāvṛtya tiṣṭhati

　　（サルヴァタㇵ シュルティマローケー サルヴァマーブリッティヤ ティシュタティ）

［マハラジの朗誦の後に続いて皆で朗誦し、次にマハラジと皆が一緒に朗誦］

この句はシュヴェーターシュバタラ・ウパニシャッドからの引用句です。「ウパニシャッド」（前出）のp.236、6～7行も参照して下さい。

この⑪句は、バガヴァッド・ギーターの１３章１４節と（サンスクリットで）同じです。意味を説明していきます。sarvataḥ（サルヴァタㇵ）は「どこでもあらゆるところ」、pāṇipādam（パーニパーダム）のpāṇiは「手」でpādamは「足」、tatは「そのブラフマン」、sarvatoは「あらゆるところ」、okṣiは「眼」、śiroは「頭」、mukhamは「顔」、śrutiは「耳」、sarvamāvṛtya tiṣṭhatiは、「それは遍在しています」という意味です。

「あらゆるところにブラフマンの手があり足があり眼があり頭があり顔があり耳があります。どこでもあらゆるところにブラフマンは現れています（遍在しています）」という意味になります。

ブラフマンは遍在しています。しかし、遍在しているとだけ言っても何もイメージが出ませんね。そこで、イメージできるように何回も説明をしています。個々の説明は瞑想を助けます。そして最初、瞑想のとき、それはブラフマンの顔です、それはブラフマンの足です、というように個別にイメージして下さい。そのイメージに集中して下さい。本当はブラフマンには顔も足もありません。しかし、最初はイメージしないとブラフマンの本性を理解することはできません。

例えば、ヒンドゥー教ではたくさんの神がありそれらの神を礼拝しています。しかし、ヒンドゥー教の神の中で最高のアイデアはマクロレベル（偉大なレベル）で「純粋な意識」です。「純粋な意識」が最高のアイデアですけれど、普通は神の像をつくって礼拝しています。これは矛盾するように思えますがそうではないです。最初から神が「純粋な意識」であることを理解することはとても難しいです。我々は普通、そのものの形も名前もなかったらそれを考えることはできません。我々が考える対象にはすべて、形も名前も性質もあります。心が思う対象に形、名前、性質がないと心はそれを思うことができません。神様は「純粋な意識」ですから形、名前、性質がないので、まったく考えることができません。

ギャーナ・ヨーガでは、あなたは身体ではない、心ではない、「純粋な意識」ですと説きますが、「純粋な意識」は、準備がないとそれを考えることはできません。なぜなら、我々は身体意識がとても強いですから「魂意識」は出ません。ですから最初に準備が必要です。準備しないとギャーナ・ヨーガの実践をいきなりすることはできません。

同じ原因で最初は神の像に集中することを実践しないと、神が意識であるということを集中して考えるのは無理です。その意味（その原因）でヒンドゥー教では、最初に形のある神を集中して考えて下さい、礼拝して下さいと助言しています。次第にその集中ができるようになってその感じで進みますと神の別の姿、「純粋な意識」の姿に集中することができるようになります。

例えば、Arundhatīという名のとても小さな星があります。普通に見てもわからないくらい小さい星です。最初はArundhatīの周囲の大きな星に集中するようにします。次にそれより小さな星へ集中を移していきます。そのようにして次第にさらに小さな星へと集中を移していきますと最終的にArundhatīを見ることができます。最初からArundhatīを見つけることはできません。ゆっくりゆっくりと進むようにします。

ですから、ヒンドゥ教ではたくさんの神の像を礼拝しています。神の像の礼拝は最初の実践です。最終的な目的は、神様は偉大なレベルで「純粋な意識」であることを理解することです。神の像の礼拝はそのための準備です。そのことを忘れますと像だけが神となってしまいます。それは無知です。

今お話ししてきましたように、「意識」を直接に理解することはできないということが一つのポイントです。そのために、最初は像を礼拝してそれから徐々に進んで下さい。形があるものに集中することによって、形がないものへと集中していくことができます。そのときに、形があるものを礼拝することによって形があるものだけが神になってしまわないように気を付けなければなりません。

ブラフマンは、本当は足も手も顔もないです。しかし、最初からブラフマンが「純粋な意識」であることを理解することはできません。最初は、それがブラフマン、それがブラフマン・・・というように深く集中して瞑想していきます。そうしますと、すべての形、すべての名前、すべての性質がブラフマンであることを理解します。しかし、それはブラフマンの理解の窓口です。次の段階で、それらの形、名前、性質（現れ）は一時的なものであり、その基礎は永遠でありそれがブラフマンであるということを理解します。基礎だけが永遠であり、amṛtam（不死）です。

ブラフマンの現れであるこの宇宙は一時的であり、現れていないものが永遠です。例えば、金の装飾品を考えてみます。金が正しくて永遠であり、金で作られた装飾品は一時的です。金の装飾品には形も名前もあります。イヤリング、ノーズリング、ネックレスなどです。しかし、それらの形も名前も一時的です。それらは加熱によって溶融しますから金から出てまた金に戻ります。中間の装飾品として現れた状態は一時的です。イヤリングもノーズリングもネックレスもすべて金ですがその現れた状態（装飾品）は一時的です。

［マハラジがシャンカラーチャーリヤの有名な句をサンスクリットで朗誦］

それは、「数えられないくらいたくさんの聖典の言っていることを短い言葉で説明します。ブラフマンだけが真理です。その宇宙は幻です。すべての生き物はブラフマンです。それが結論です」という意味の句です。

次に⑫句を説明します。

⑫　sarvendriya guṇābhāsam sarvendriya vivarjitam

　　（サルヴェンドリヤ　グナーバーサㇺ　サルヴェーンドリヤ　ヴィヴァルジタㇺ）

　　　sarvasya prabhumīśānam sarbasya śaraṇam suhṛd

　　（サルヴァスヤ　プラブミーシャーナㇺ　サルヴァスヤ　シャラナㇺ　スリッド）

［マハラジの朗誦の後に続いて皆で朗誦し、次にマハラジと皆が一緒に朗誦］

この⑫句はシュヴェーターシュバタラ・ウパニシャッドからの引用句です。「ウパニシャッド」（前出）のp.236、10～12行も参照して下さい。

sarvendriya vivarjitam（サルヴェーンドリヤ　ヴィヴァルジタㇺ）は「ブラフマンに感覚は何もない、身体の部分は何もない」、sarvendriya guṇābhāsam（サルヴェンドリヤ　グナーバーサㇺ）は「すべての感覚はブラフマンの知識で働いています」という意味です。sarvasya prabhumīśānam（サルヴァスヤ　プラブミーシャーナㇺ）は「すべてのものの持ち主、オーナーです」、sarbasya śaraṇam（サルヴァスヤ　シャラナㇺ）は「すべてのものの避難所です」、suhṛd（スリッド）は「友達です」という意味です。

「ブラフマンは自分の感覚も身体も何もないですが、すべての生き物の感覚はブラフマンの知識で働いています。そして、ブラフマンは宇宙のすべてのもの、すべての生き物の持ち主です。ブラフマンはすべてのものの避難所であり友達です」という意味になります。

この⑫句は、バガヴァッド・ギーターの１３章１５節に似ており、最初の句は共通します。

ブラフマンには感覚が何もありません。感覚には行動の器官と認識の器官とがありますが、ブラフマンにはそれらが何もありません。そして、すべての生き物の感覚はブラフマンの知識を借りて働いています。indriaとは、通常、行動の器官と認識の器官のことですが、別のアイデアによれば次の２種類（内の器官と外の器官）になります。

　Antah + indriya　それによって内のものを理解する器官（心、知性）

　Bahih + indriya　それによって外のものを認識する器官（眼、耳、鼻、舌、皮膚）

indriaという場合、通常は、外の器官を表しますが、このアイデアによれば、心もindriaです。

すべてはブラフマンの知識で働いています。ブラフマンは個人的なレベルで我々の魂の形で存在しています。我々の中に「内なる自己」の形でブラフマンは存在しています。アートマンだけにその意識があります。

ヒンドゥー教の考えでは、アートマン以外の人格レベルはすべて物質です。

プラクリティはその中に３つのグナ、すなわち、サットワ、ラジャス、タマスがあります。プラクリティは物質です。身体はタマス的な性質のグナで、生命エネルギーはラジャス的な性質のグナで、そして心はサットワ的なグナでつくられていますが、これらはすべて物質です。しかし、身体は動き、感覚は働き、認識し、心は考えることができます。どうして物質であるのにどうしてこのような働きが可能なのでしょうか。例えば、この机が自分で散歩に出かけることはありません。机も椅子も自分で動きませんね。物質は自分で動くことができませんし自分の意思もありません。

身体など物質であるのにもかかわらず働きがあるのは、「魂の意識」を借りているからです。その魂はブラフマンです。ブラフマンの知識で働いているというのはその意味です。アートマンの知識によって物質である感覚は働いていますが、アートマンとブラフマンは一緒ですから、すべての感覚はブラフマンの知識で働いていると言えます。これがsarvendriya guṇābhāsam（サルヴェンドリヤ　グナーバーサㇺ）ということです。

次に、sarvasya prabhumīśānam（サルヴァスヤ　プラブミーシャーナㇺ）とあります。ブラフマンが宇宙のすべての生き物とすべてのものの持ち主、オーナーであるというのは、ブラフマンが宇宙をつくり、維持し、破壊しているからです。

次に、ブラフマンはすべてのものの避難所（sarbasya śaraṇam）とあります。ブラフマンはすべての生き物の避難所です。困ったとき、避難所のことを考えます。例えば、災害のときです。災害には自然災害、人的災害、自業自得があります。苦しい時の神頼みということわざもありますが、神様が避難所です。ブラフマンが避難所です。人を避難所としてもその力には限度があります。人のサポート、お金のサポートでは助けることができない状態がありますね。しかし、神、ブラフマンの避難所のサポートは無限です。人が避難所になると利己的で見返りを求められることもあります。しかし、神はあげるだけでもらうことは考えません。神は見返りのことを考えないでサポートしています。力も無限です。そのことを考えると神は永遠の支持者（サポート）であり、永遠の避難所です。神は遍在ですからどこにでも神様は現れます。

それから、ブラフマンは友達（suhṛd）とあります。

日本では友達という言葉を頻繁に使っています。例えば、２回挨拶をするともう友達と言っています。インドでは普通そのように言いません。本当に仲良しになった後に友達と言っています。日本では関係が浅くても友達という言葉を使っています。サンスクリットで友達の基準は何でしょうか。祭りのときにあなたと一緒に行きます。遊びのとき一緒に行きます。飢饉（famine）のときもあなたと一緒にいます。あなたのことを避けません。国の問題があるときもあなたを避けません。裁判所にもあなたと一緒に行きます。親戚のお葬式のとき火葬場までもあなたと一緒に行きます。その人が本当の友達です。それが基準です。そこまでサポートする人だけが友達です。遊びだけでなく困ったときもサポートするのが本当の友達です。

その友達はどなたでしょう。それはブラフマンです。もちろん、そこまで理想的ではなくともそのような種類の友達は特別ですがいます。しかし、その友達も一時的ではないですか。その人が死ぬまでですね。神様はそうではありません。神様は永遠の友達です。神様は死ぬ前も友達、死んだ後も友達です。

一番の恐怖は死の恐怖ですが、その恐怖はどのように無くなりますか。神様は私が生きている間も面倒を見て下さり、私が死んだ後も面倒を見て下さる、という信仰です。その深い信仰がありますと死の恐怖はなくなります。生きている間も面倒を見て下さり、死んだ後も面倒を見て下さることが、永遠の友達ということです。人間の友達は私が生きている間だけしか面倒を見ることはできません。死んだ後はできません。ブラフマンだけは死んだ後もできます。神だけが永遠の友達です。そしてサポートの力にも限度はありません。

現代の人の大きな問題は、困ったときにどなたがサポートするかということです。神様を信じていないですから。困ったときにどこからサポートが来るでしょうか。それがわかりませんからとても困っています。苦しい時の神頼みというのは、昔のことわざになってしまっているかもしれません。現代の人はそのことわざを信じていないかもしれませんね。神様を信じていないのですから神頼みしようもないです。何でもなかった人に突然に大きな病気の問題が発生し、どうしたら良いかわからなくなり、どなたからサポートが来るかがわからず、恐怖、不安、苦しみ、悲しみに苛まれた人の例もあります。

バガヴァッド・ギーターの９章１８節は同じ内容です。

［９章１８節をマハラジと皆が一緒に朗誦］

９章１８節の翻訳文は以下の通り（サンスクリット原文を含め、シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター（日本ヴェーダーンタ協会／2007年10月2日第2刷発行）参照）：

　　*私（クリシュナ神）は全ての最終目的であり、保護者であり、主であり、目撃者である。また、全ての住処、避難所、友人でもある。さらに私は全ての起源であり、消滅であり、基礎であり、宝庫であり、そして不滅の種子でもある。*

この９章１８節のサンスクリットの説明をします。Gatirは「（我々の）すべての仕事の結果（カルマの結果）は私（クリシュナ神）です」、bhartāは「養い」、prabhuḥは「持ち主」、sākṣīは「目撃者」という意味です。「目撃者」とは、隠れて行うことも神様からは隠すことができない、ということを意味します。神様はすべてのことをご存知です。ここで一つの面白い話があります。先生（グル）はブラフマンのことを弟子達に教えた後、「小さい虫を誰もいない場所に行って殺して下さい」と弟子達に言いました。弟子達は気を付けて動物さえもいない場所を選んでその虫を殺してグルに報告しました。しかし、一人の弟子だけはその虫を殺さないで持っていました。その弟子は「グルの仰るような場所を見つけることはできませんでした。あらゆるところに神様、ブラフマンがいらっしゃいますからその場所はありませんでした。ですから私は虫を殺すことはできませんでした」と言いました。

誰もいなくても神様はいらっしゃいます。神様は全部知っていらっしゃいますから間違ったことをしたら神様に許して下さいと祈った方が良いです。素直が良いです。神様から隠すことはできませんから。nivāsaḥは「場所」という意味です。神様は皆さんの場所です。śaraṇamは「避難所」、suhṛtは「友達」です。これは先ほど説明しました。prabhavaḥは「私から皆さんは出ています、皆さんの源は私です」、pralayaḥは「皆さんが亡くなったあと、また私に戻ります」という意味です。sthānaṁ nidhānaṁは「ものを置く場所」、bījam avyayamは「無くなっていない（不滅の）種」という意味です。不滅の種とは、神が宇宙の創造の永遠の種であることを言っています。

［サンスクリットの詩（下記）をマハラジが詠唱］

‘ Tvameva mātā cha pitā tvameva

Tvameva bandhuseha sakhā tvameva

Tvameva vidyā dravinam tvameva

Tvameva sarvam mama devadeva ’

おお神様、あなたは私のお母さんです。あなたは私のお父さんです。

あなたは友達です。とてもとても仲良しです。

あなたは学問です。あなたは富です。

あなたはすべてのものです。

この詩は先ほどの節と同じアイデアです。すなわち、ブラフマンはすべてのものの持ち主であり、避難所であり、友達です。すべてはブラフマンです。